

加賀信広教授還暦記念 言語学特別ワークショップ  
「られる」と「らさる」の言語学  
～日本語の受動文・関連構文をめぐる～

日本語の受動文に関するワークショップを開催いたします。日本語受動文と関連現象を、統語、意味、語用論の観点から分析した講演と研究発表（計7件）を予定しております。「ラレル」で表現される日本語受動文と自発・可能表現、逆使役現象、北海道方言・ケセン語の「ラサル」形表現が関連する脱使役現象など、幅広いトピックをカバーしています。日本語学、英語学、方言学などにご関心をお持ちの多くの皆様のご来聴をお待ちしております。

日時：2018年9月4日（火）12:00～17:30

場所：筑波大学 大学会館国際会議室

備考：参加費無料、事前申し込み不要

12:00	開会（趣旨説明）	
12:05-13:05	基調講演 「意味役割階層と『られる』：自発・可能・受身の統語論」	加賀信広（筑波大学）
13:05-13:15	休憩	
13:15-13:45	「日本語の所有者受動文について」	本間伸輔（新潟大学）
13:45-14:15	「現代日本語受動文の多様性について：有生性制限の役割」	石田尊（筑波大学）
14:15-14:45	「自他交替とサル表現」	新沼史和（盛岡大学）
14:45-15:00	休憩	
15:00-15:30	「北海道方言『ラサル』と接辞-e(r)-を含む動詞」	並木翔太郎（長野県立大学）
15:30-16:00	「日本語の受動と再帰—動作主性の観点から」	小藁哲哉（大阪大学）
16:00-16:30	「受動と逆使役」	宮腰幸一（筑波大学）
16:30-16:45	休憩	
16:45-17:30	全体討論（45分）	

※各発表のタイトルは変更になる場合があります。

#### 会場までのアクセス

- ・つくばエクスプレスつくば駅から筑波大学循環バス右回りで8分（「大学会館前」下車）
- ・東京駅八重洲口から高速バス「つくば号」で75分（「大学会館」下車）

ご不明な点は下記連絡先にお問い合わせ下さい。

お問い合わせ先：

金谷 優（筑波大学） [kanetani.masaru.gb@u.tsukuba.ac.jp](mailto:kanetani.masaru.gb@u.tsukuba.ac.jp)

今野弘章（奈良女子大学） [konno@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:konno@cc.nara-wu.ac.jp)

筑波大学英語学研究室

検索

<http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/eigogaku/>

## 各発表の概要

### 意味役割階層と「られる」：自発・可能・受身の統語論 加賀信広（筑波大学）

日本語における受動の「られ」と使役の「させ」の統語的な対立は、自動詞・他動詞の語彙的な対立に平行していると考えられる。日本語では、受動文に直接受身と間接受身という2分類があり、使役文にヲ使役とニ使役という2分類がある点も示唆的である。このような観点から、主に「られる」文を Kaga (2007)の意味役割階層に基づいて分析し、「られ」が受身だけでなく、自発や可能の用法をなぜ併せもっているのかという、宿年の問題に統語論的な答えを用意したい。

### 日本語の所有者受動文について 本間伸輔（新潟大学）

本発表では、「太郎が成績を褒められた」のような日本語の所有者受動文について、他の二種類の受動文である直接受動文と間接受動文と比較しながら、表層主語の統語的派生、所有される対象物を表す目的語の統語的性質、動作主が「に」を伴う場合と「によって」を伴う場合の統語構造の違いを検討する。

### 現代日本語受動文の多様性について：有生性制限の役割 石田尊（筑波大学）

現代日本語の rare の受動文のうち、二格直接受動文と分離不可能所有の所有者受動文のペア（例：「奏太<sub>i</sub>が凜子に{<sub>o</sub>頭<sub>j</sub>を}殴られた」）、および「奏太が恋人に死なれた」のような間接受動文と、「奏太が恋人<sub>i</sub>に手首<sub>j</sub>を切られた」のような分離不可能所有の間接受動文のペアを取り上げ、どの場合も有生性制限を伴う名詞句移動が関与していることを確認する。さらに、これらの受動文の分離不可能所有関係を分析する際に、派生の過程での「二重対象語構文」構造を仮定する柴谷 (1978)のようなアプローチの問題点を指摘した上で、日本語受動文分類に関する議論に有生性制限の問題を適正に位置づける。

### 自他交替とサル表現 新沼史和（盛岡大学）

本発表では、自他交替を許す動詞とサル表現との共起に関する考察を行う。一般的に、サル表現は、自動詞（走らさる）にも他動詞（飲まさる）にも共起可能であるにも関わらず、自他交替を許す動詞の場合、どちらの動詞にも結合するというのではなく、どちらか一方である（集まる—集まらさる、集める—\*集めらさる）。また、前例のように自動詞と結合する場合もあれば、他動詞と結合する場合もある（割る—割らさる、割れる—\*割れらさる）。このような自他交替を許す動詞とサル表現との一般化を提示、説明を行う。それと同時に、日本語における自他交替を許すマーカの役割の本質について考察を試みる。

### 北海道方言「ラサル」と接辞 *e(r)* を含む動詞 並木翔太郎（長野県立大学）

北海道方言のいわゆる自発の助動詞「ラサル (-rasar)」には、偶発行為を表す「自発用法」と、到達のアスペクトを表す「到達用法」が存在する。自発用法については、共起する動詞の類に制限がなく、自動詞・他動詞を問わず共起する一方、他動詞を自動詞化する「逆使役接辞」として分析される到達用法では、述語がある種の結果状態を含意する場合に容認されやすいことが先行研究によって指摘されている（佐々木 2007, 2015, 高橋 2015, 大野 2016 など）。本発表は、これらの用法を問わず、接辞 *e(r)* を含む動詞とラサルの共起が容認されないという事実（cf. 並木 2015）に対して、形態統語的観点から包括的な説明を試みる。

### 日本語の受動と再帰—動作主性の観点から 小薬哲哉（大阪大学）

通言語的な研究では、動作主・被動作主の対立が明確な能動態・受動態に対して、再帰態はその中間的なヴォイスとして位置づけられることが多く、また日本語文法研究においても同じような考えが共有されてきた（仁田 1982 など）。このような先行研究での見解に対して、本発表では、受動と再帰というヴォイスが必ずしも相互排他的関係ではなく両立可能であることを日本語の再帰構文のデータに基づいて示す。そのために、当該構文を名詞の意味的特性と述語の「再帰的含意」に基づいて分類した上で、どのような場合に受動文として成立可能かを考察し、動作主性の観点から分析を行う。

### 受動と逆使役 宮腰幸一（筑波大学）

本発表は、日本語の受動と逆使役の共通点と相違点（の一端）を指摘し、それらの日本語ヴォイス体系における位置づけについて論じる。さらに、他言語の対応表現との比較・対照を通して、ヴォイスに関する日本語文法の個別性と通言語的一般性も探求する。